
掟

カルパッチョ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】 掟

【Nコード】
N3208D

【作者名】
カルパッチョ

【あらすじ】
「二十歳になればこの集落からは出てはいけない」そんな掟がある集落に住む一人の青年、山崎恭介は掟の真意を探ろうとする。やがて恭介は不思議な声を耳にする。その声の主の正体とこの集落の掟の関係・・・そして恭介の両親の死の真相・・・長老達が隠している集落の秘密とは・・・

一話

一話

この集落には昔から一つの掟があつた。二十歳になると同時にこの集落からは一歩も出ては いけないという掟が。その掟を除けばとてもいい場所ではあつた。だがこの掟だけが人々を 苦しめていた。他の地域より毎月定期的に食料は届けられる。普通に生きていく分にはここ から出なくても困らない。だが、掟はいかなる場合でも出る事を許さない。大人になればこの集落に生まれた者は外の世界とは隔離された空間でしか生きていけないのだ。そして今年二十歳になる一人の青年は集落の長の家へと駆け込んでいた。

「なぜ、こんな掟があるのか聞かせて欲しい」

「・・・私もそれは知らん。この掟は・・・百年以上前から続いておるからな・・・」

「本当は知ってるんだろう？・・・この集落には何か秘密でもあるのか？」

青年は長に向かい怒鳴っていた。考えてみればこんな掟おかしいのだ。何故二十歳になれば 集落の外に一歩も出る事を許されないのだろうか。青年はこの掟があることに關して何らかの秘密がこの集落にあると考えていた。だがそれを誰に聞いても答えてくれない。皆、知らないとかそんなものはないと言っただけだ。

「教えてくれ、この集落には何がある？・・・俺達に關係していることなのか？」

「秘密などない。・・・掟はこの集落を存続させるためのものだ。それ以外の理由などない」

長は怒鳴りながら言った。この集落の存続のために作られたただだと。都会に人々が移住することのないようにしているだけだ。だが青年は見逃さなかった。青年が理由を聞いた時 に長が困っていたのを。ちゃんとした理由があるのなら困る必要など無い。やは

りこの集落 には何かがあるのだ。青年は立ち上がり、長の家を後にする。青年の名前は山崎恭介。父親 と母親はすでに他界している。親戚からは事故だと聞かされているが噂では両親は掟を破ろうとしたため殺されたとも言われている。

「恭介」

「・・・秀二か。どうかしたのか？」

長の家の前で声をかけてきたのは恭介の幼馴染でもある上田秀二。秀二も恭介と同じような 考えを持っているが、長に文句を言ったりしたら親に何を言われるか分からないので言いたくても言えない状況が続いている。

「こここのところ毎日だね、恭介が長の家に行くのは」

「俺は真実を知りたいんだ。おの掟がなぜ作られたのかを」

それが間違っていることなのだろうか。そう、恭介が思った時、どこからともなく声が聞えた。

『あなたは間違つてないよ』

明らかに男の声ではなかった。小さい女の子のような声だ。秀二は少し声が高いが、そこま で高くはないはずだ。恭介は周りを見渡した。しかし、恭介の周囲には秀二しかいなかった。きよるきよるとしていると秀二が声をかけてくる。

「どうかしたの？」

「さっき声が聞えなかったか？・・・小さい女の子の」

「僕は聞えなかったけど・・・気のせいじゃないの？」

秀二はそう言うが恭介は確かに聞いたのだ。ぼんやりと聞えたなんて言うレベルではない。 はっきりと聞えた。まるで頭の中に直接響くような声だった。その後恭介は秀二と分かれ自分の家に戻る。そして、家の中で一人あの声が言っていたことを思い出してた。「間違っていないか・・・」

あの声はまるで恭介の考えに答えるかのように聞えてきた。偶然にしては不自然だ。だがあ の時は誰も傍にいなかった。もし、あの声の主が元々見えない存在だとしたらどうだろう

か。恭介はまだ知る由も無かった。この集落に隠された重大な秘密と掟の真意を、そしてその掟によりたくさんの犠牲が過去に払われたことを・

二話

二話

あの声を聞いてから二日が過ぎた。恭介はこの日も長の家を訪ねようとしていた。だがそこで信じられない事を聞く。

「・・・秀二が・・・死んだ？」

恭介は耳を疑った。この集落は大自然の中にある。四方を山で囲まれているのだ。その山の中で秀二が死体で発見されたらしい。その山は本来二十歳になれば立ち入ることすら禁じられる場所だ。秀二は何をしに山の中に行ったのだろうか。恭介は長の家へと駆け込んだ。

「・・・あんたに聞いても無意味だとは思うが・・・聞くぞ。秀二は殺されたのか？」

「何を物騒なことを・・・こんな場所で殺人事件など起こるはずもない」

「なら、自殺か？」

長は答えない。恭介は長の家を思い切り殴り走って出て行く。一体何が起こったのだろ　うか。あれだけ親のためにも掟を守ろうとした秀二が何故山の中にいたのだろうか。恭介は　秀二の家へと向かう。そこには秀二の遺体と秀二の両親がいた。

「山崎君か・・・」

「秀二は・・・どうして山の中に・・・」

秀二の父親は分からないと言った。何故掟を破るような事をしたのか。そんなことは両親に　さえ分からないのだ。だが父親はこの二日間秀二の様子がおかしかったと言う。誰もいない　のに一人でぶつぶつと呟いていたらしい。

「おじさんは・・・掟について何か知っていますか？」

「分からないよ。・・・ただ破ってはいけないことだとしかね」

それはこの集落の人間であれば誰もが知っていることだ。恭介は

秀二の家を出てから急に怖く なって来た。秀二が自殺したとは考えにくい。ならば誰かに殺されたということになってくる。その理由は恐らく掟が関わってくるだろう。ならば次に恭介が殺されてもおかしくはない。そんなことを考えていると、またあの声が聞えていた。

『大丈夫よ・・・あなたは殺されないわ・・・』

「・・・何なんだよ・・・お前は」

『私はあなたの味方・・・ううん、この集落を守る者・・・』

恭介は頭を振った。変なことを考えているから聞えもしない声が聞えてくるのだ。何も考えなければいい。秀二の事も事件だとすればそれでいいじゃないか。それが一番自然だ。だがそこでふと気になる。秀二はどの方角の山の中にいたのだろうか。この集落の四方は完全に山で囲まれているが、その中で南側の山だけは誰であるうと入ることを禁じられている。まさか秀二が倒れていたのは南側の山ではないのか。

『やっと気づいたみたいね・・・教えてあげるわ・・・彼が倒れていたのは南側の山よ』

「・・・南側・・・」

恭介は声を信用することが出来ず、秀二の両親に尋ねた。秀二はどこで発見されたのかを。

「・・・南側の山の入り口付近だそうだ・・・それがどうかしたのかね？」

「いえ・・・なんでもありません」

恭介は身震いをした。秀二はいつも口では掟を破るつもりはない、それが両親のためにもなると言いながらも何かを掴んでいたのではないだろうか。そして禁じられ区域に入ろうとした。そしてそこで殺されたのだ。この集落の秘密を守ろうとする何者かに。恐ろしい話だがありえないことではない。

「秀二・・・お前は何を知ったんだ？」

その答えは返ってくることは無かった。だが確かに秀二は何かを

掴んでいたに違いない。それも他者に伝えてはいけないような情報。

「・・・教えてくれ・・・誰かを犠牲にしてまで守るべき事なのか？」
だがその質問にあの声が答えることはなかった・・・

三話

三話

親友の死から一日が過ぎた。たった今葬式が終わった所である。恭介は空を見上げていた。結局秀二の死は事故死ということ片付けられた。だがその事故の原因や詳細は告げられて

いない。恭介の叔父が言うには恭介の両親の時もこんな感じだったらしい。秀二の両親は原因究明を求めてなどいないし、皆納得していた。一部の人間を除いて。その大きな原因は秀二が倒れていた場所だ。誰もが立ち入りを禁じられている場所、南側の山。そこに秀二は倒れていた。立ち入り禁止の理由がよく知らないがそこには悪霊等がよく出ると言われている。だから皆、事故死などとは思っていないかった。秀二がいつ山に入っただかは分からない。

だが、この数日の間雨は降っていない。土砂崩れが起きる可能性はまずない。考えれるのは木の上から転落して亡くなったということだが、秀二は木登りは苦手だった。わざわざ進んで木を登ったとは思えない。もし、木に登る必要があったのなら話は別だが。葬儀場にいるほとんどの者が悪霊に憑かれたのだと囁いていた。

「・・・秀二が・・・あんな場所に行ったとはな・・・」

「信じられないな・・・俺は」

恭介の隣にいつのまにか青年が立っていた。恭介と秀二の共通の友達である、小谷正平。かなりの変わり者として知られている。その理由は集落の長の一族でありながら掟に批判的な人間だからだ。そのためか、長からはかなり嫌われているらしい。血の繋がった家族でありながら毎日口論ばかり。正平の口癖は俺の家族は掟に縛られている古い腐った人間だよである。

「・・・残された時間は少ない・・・ってことか・・・」

「え？」

思わず聞き返してしまう。とても意味深な発言であった。だが正

平はとぼけた顔をしている

「お前も気をつけろよ、恭介」

そう言って葬儀場を後にする。今の言葉は何を示していたのだろうか。

『・・・一つ忠告するわ。・・・次に犠牲になるのは彼よ』

「冗談は止める。・・・秀二みたいなことがまた・・・起こるなんて・・・

」

『・・・言つてたでしよ、彼。残された時間は少ないって』

恭介はばかばかしいと思った。秀二の偶然だ。また同じようなことがもう一度起こるなんて信じたくはない。正平も消されるといのか。一体誰が何のために。そんなことは起こるはずはないと思いつつも不安になってきた。正平だって狙われる理由はある。それに正平自身身さきほどの発言は危機を感じているからなのではないだろうか。

「どうすればいい？・・・どうすれば・・・助けれるんだ？」

『彼が南側の山に入るのを止めることね。それが一番良い方法よ』

南側の山。声はそこでまた何かが起こるという。それを止めるためにはあの山に入る前に正平を止めるしかない。この日の夜恭介は南側と集落との境目にいた。正平を止めるためにである。今日かどうかは分からないが、今日では無いとも言いきれない。時刻は午後十一頃ほ。とんの者が寝静まった頃一つの人影が動いていた。ゆつくりと南側の山へ向け歩いていく

「待て、正平」

動きが止まった。恭介は懐中電灯で人影の方を照らす。そこには正平がいた。正平はまるでいたずらが見つかったかのような子供の顔をしている。だがこれはいたずらなんていう生易しいものではない。

「教えてくれ、この山の中に何がある？」

「恭介・・・お前は知らなくていい。・・・いや、知らない方が幸せだ」

「お前も秀二も何を知っている？ここに何がある？」

問い詰めたが、正平は答えない。ただ黙っているだけだ。知らない方が幸せ。よほどひどいものなのだろうか。正平は山に向かうとする。それを恭介は全力で止めた。いかせるわけにはいかない。

「止めるな、恭介。・・俺は・・秀二や今までの犠牲者の魂を救う」
「お前・・何を・・」

正平は全力で恭介を振り払った。恭介が立ち上がるより早く正平は山の中へと消えていく。追わなければいけない。そうしなければまた消えてしまう。だが、恭介は立ち上がることは出来なかった。まるで何かの意思が恭介を拒むかのようにして。

「犠牲者の魂を・・救う？」

秀二や今までの犠牲者。それらに共通するのは何か。一つしか思い浮かばなかった。集落の掟だ。正平は切羽詰っているかのようだった。昼間の発言と言い、今の様子と言いどうもおかしい。一体何が起きているのだろうか。何が彼をあそこまで追い込んでいるのだろうか

「・・追いなさい。そうすれば・・あなたは全てを知ることになる」
「追う？そんなことをしても殺されるだけだ・・」

「もう誰も犠牲にはならなわ。彼が最後の犠牲者になる・・」

声は今夜一つの事に関しては決着がつくと言う。小谷正平という人物を犠牲に。だがそれで全てが終わるのではない。正平では全てに終止符を打つことは出来ないと言は語った。

「全てを終わらせるのは・・あなたしかいないのよ、恭介」
「・・俺が全てを終わらせる？・・何を終わらせるんだ？」

恭介は山を見上げた。声は言った追えば全てを知る事になると。恭介は少し躊躇ったが、やがて躊躇を振り払い、山の中へと入っていく。この集落の秘密、両親の死の真相。親友が死んだ理由。様々な謎の真実を知るために恭介は声を信用し先に山の中へと消えていった正平を追うことにした・・

四話

四話

「血？」

暗い山道を歩いていると、血の匂いがしてきた。それも少しではない。

はつきりと分かるほどの匂いだ。一体この先で何が起きているのだ

ろつか。恭介は慎重に少しずつ前へと進んでいく。やがて誰かが倒れ

ているのが見えた。

「正平・・・」

「・・・恭介・・・か」

右腕の部分から血を流して倒れている正平がそこにいた。正平の少し

後ろには一本の刀が落ちていた。その刀の刀身も血で真っ赤に染まって

いた。まだ意識はあるようだ。今からでも誰かを呼んでくれば助かる

かもしれない。だが正平はそれを拒否した。

「もう長くは・・・もたん」

「何があつたんだ？」

「・・・恭介・・・もうこれ以上犠牲者は出ないはずだ・・・もう何も心配

することは・・・ない」

途切れ途切れで正平は語る。今夜ここであつたことを。それは恭介の

想像を絶するものだった。正平は今夜ここで自らの命を懸け、戦いを

挑んだ。古くから集落の秘密と掟を守るために全力を尽くした者達に。

「・・・秀二の死からだ・・・俺が・・・彼らを殺そうと計画したのは・・・」

最初の二、三人は楽だったと正平は言った。彼らは長の仲間だからだ。

長の孫である正平のことを疑う者は誰もいなかった。だが仲間が討たれ

たことで彼らも反撃に移った。結局全員を討つことは出来たものの正平

も傷ついた。

「だが・・・間違いだった・・・全ては・・・彼らが正しかった・・・」

「正平？」

「・・・恭介・・・に・・・げろ・・・も・・・う・・・おし・・・ま・・・い・・・だ」

恭介は正平の名を何度か口にした。だが正平が返事をする事はなかった。一体正平は何が言いたかったのだろうか。逃げる、もう

お終い

だ。正平が途切れ途切れに口にした言葉からはとても切羽詰っている

状況が窺える。正平が秀二を殺した連中を倒しそれで終わったのでは

ないのか。気になるのは正平が彼らが正しかったと言ったことだ。

「・・・恭介、もう時間は少ないわ・・・」

「時間？」

「また悲劇は繰り返されるの・・・」

声は一方的に語り続けた。悲劇は繰り返される。またたくさんの

犠牲

者が出る。そしてしばらく経てばそれは終わりを告げ、一部を除き皆

がその恐怖を忘れる。そんなことを繰り返していた。何が始まる
とい

うのだろうか。恭介は正平の遺体と共に山を降りていく。そして
長の

家へと向かった。長は起きていた。もう真夜中だというのに。ま
るで

今夜何が起こるかはじめから知っていたかのようなうだ。

「・・・恭介よ・・・私を許してくれとは言わん・・・だが今から語るこ
とは

全て事実だ・・・どうか聞いてくれ」

長は語り出した。この集落と掟の秘密を。この集落が出来たのは
そん

なに昔ではないらしい。今から半世紀ほど前のことのようなうだ。こ
こに

集落が出来たのには一つの理由があった。

「生贄のためだよ・・・古くから災いをもたらす化け物の・・・な」

「生贄？」

「その化け物は生贄を出せば他の者には手を出さないと聞いたそう
だ」

そして国は仕方なく、数十世帯をこの地に移り住ませた。事實は全
て伏せて。そして悲劇は起きた。人々は何も知らず日々を過ごして
いた。だがある日突然集落の中で次々と人が消えていった。何の前
触れもなく。集落は混乱し、人々はここから出て行くしかないと思
断した。そしてこの集落から人々が姿を消すと、化け物は暴れ出し
た。

「化け物は・・・人を喰うことで生きているらしい・・・。それも大人
だけ

だ。二十歳未満には被害は昔から出ていない・・・」

やがて集落の一部の人は自分達さえ我慢すれば大勢の人間が助かる
と考え出した。そこで生まれたのがあの掟だ。生贄がこの集落にい

る限り化け物が暴れ出すことはない。結局は一部の人間が犠牲になるしかない。だがもちろん反対者は出た。そこで当時の長は集落から出て行こうとする者を全て死に至らしめた。それで人々に恐怖を与え、ここから出る事のないようにしたのだ。そして化け物は十年ごとに人々の大半を喰らっていった。

「まさか・・・今年が・・・」

「そう。・・・今年は前に生贄が喰われてから丁度十年だ」

悲劇は繰り返される。長もそう言った。もう誰も止めることは出来ない。一度始まってしまえば後は時が経つのを待つしかない。山の中に眠る化け物が満足するまで。恭介は長の家を後にした。このまま何も出来ずにただ悲劇が終わるのを待つしかないのか。

「・・・一つだけ方法はあるわ」

「・・・教えてくれ・・・一体なにをすれば止めれる？」

「・・・南側の山の中に小屋があるはず。・・・そこにまずは行きなさい」

恭介は声の指示通りに動いた。幸い、小屋はすぐに見つかった。正平が倒れていた地点から少し登った所に小屋はあった。その小屋の中に恭介は入る。その小屋の中には鎖で完全に封じられている棺桶があった。そこに何が入っているのかは容易に想像出来る。この集落を長い間苦しめてきた化け物だろう。

「・・・封印を解きなさい・・・それでこの集落は救われる」

「・・・集落の外はどうなる？」

「もうそんなもの・・・ないのよ」

恭介は耳を疑う。集落の外が無い。それはどうということなのだろうか。恭介の目の前に突然鏡のようなものが現れた。そこに写し出された光景は荒れ果てた大地だった。とても人が住めるような環境とは思えない。他の生物が生きているかどうか疑問だ。

「これが・・・この山の向こうの世界・・・」

「・・・ばかな・・・化け物は生贄だけで満足してたはずじゃ・・・」

『あの長は全てを知らないわ。・・以前集落の人間がここを出た時に化け物はこの集落以外の人間を全て抹消したのよ』

化け物とこの集落の人々との間に交された約束。それはこの集落に生きる全ての人間が化け物の生贄となること。その約束は一度破られた。化け物はその際にその代償として他の地域の人間を一人残らず滅ぼしたという。恭介は戸惑っていた。鏡の向こうに広がる世界は悲惨なものであった。確かに外がそのような状況であれば、解放しても構わないだろう。だが何かおかしいのだ。何かが引つかかる。何かが腑に落ちない。何かが矛盾している。あまりにも不自然すぎる。

『何を躊躇うの？躊躇う必要なんて・・』

「・・おかしいんだ・・」

『おかしい？』

「化け物がここに封印されているのなら・・長が言っていたようなことは起こるはずが無い・・」

恭介は声に聞いた。何者だと。この声の正体は犠牲者でもなければこの集落の人間でもない。最初かに恭介を利用していただけであり、この集落を助けるつもりなどなかった。恭介は小屋の床に散らばっていた一本の棒を手にする。それで鏡を打ち破る。

「これも全て幻のはずだ。・・お前は一体・・」

『もう隠しても無駄なことね・・』

恭介は身構えた。小屋が白い光に包まれ、そして恭介の前に白い塊が現れる。それが声の正体であろうか。恭介はその塊を睨んでいた。今なら分かる。これこそが全ての元凶だと・・

五話

五話

「秀二を殺したのも・・正平を殺したのも全てお前か」

「・・そうよ。あの二人は邪魔だから殺したの」

恭介の中に怒りが満ちていく。声は語った。何故二人を殺したのかを。秀二の方は簡単であった。化け物が封印されていることを知り、化け物の封印されている箱ごと移動させようと考えたのだ。そうすればこの集落は救われると信じて。声にとつてそれはまずかった。そんなことをされればどうしようもない。だから殺すしかなかった。秀二の体に憑依し、自殺させた。だがそれが原因となり、正平が動くことになる。秀二に憑依したことではとどの力を使い果たしていた声はどうする術もなかった。だから、声は彼らを利用した。恭介と同じように彼らに語りかけ、正平と戦わせた。

「・・もう力は残ってないんだろ？」

「あなたには何も出来はしないわ。あなたは何の力も持っていないもの」

「ああ・・そうだな」

それでも諦めるつもりはない。全ての元凶が目の前にいるのだ。こいつを倒せば全て終わる。秀二や正平達の死だつて無駄にはならないのだ。

「・・俺の両親を殺したのも・・お前か？」

「あなたの両親は知らないわ・・私もあの頃はまだ実体があつたからね。そんなことをする必要なんて無かつた」

結局両親の死の真相は分からないままか。恭介は少し残念に思えた。恭介はそれが一番知りたかった。両親は何故死ななければいけなかったのかを。

だがこの化け物でさえそれを知らないのだ。

「掟を作らせたのもお前・・・か」

『そうよ』

「・・・掟を破った人達を殺したのも・・・」

『私よ。・・・まだ実体がある時は全て消していたわ。跡形も残さずに、ね』

だから秀二達の遺体はあったのか。秀二や正平はそうしたくても出来ない事情があったのだ。誰がやったかは分からないが、化け物の実体は封印され、魂だけがこの山の中に漂う形となったからだ。恭介は棺桶を見ていた。あの鎖を解き放てば、化け物は再び蘇るのだ。魂だけの存在となった化け物は誰かを利用しないと復活することはもう出来ない。だがこのまま放っておいても根本的な解決にはならない。

「もう俺に憑依する力はないようだな・・・」

『・・・無いわ。そんな力があるんならとつくに憑依してるもの』

力づくで誰かに憑依し、封印を解くなんてことはもう出来ないのだ。秀二に憑依した時にほとんどの力を使い果たしている。だが声は笑っていた。いずれはまた力は戻ると。力さえ戻れば誰かに憑依も出来ると。恭介を利用したのは早く復活がしたかったからだ。だがそれにこだわりすぎたせいで、少々面倒なことになっている。

『だが・・・記憶を消す程度の力はまだある・・・』

「・・・記憶・・・を消す？」

『記憶を消してもう一度あなたを利用すればいい
今度はあの二人はいないもの』

邪魔者はいない。もう一度最初から行えば今度は成功する。声は正平を追わせた所で失敗をおかしていたのだ。声の計画では小屋の中で彼らが争っているはずだった。だから、声は正平が死のうとしていることを恭介に告げ、正平を追わせた。しかし、そこで誤算は起きた。正平は最初から見抜いていたのだ。だから小屋の中では戦わなかった。声の計画を崩すために。しかし、もう正平はこの世にはいない。

『私を仲間と思わせるためにはどうしてもああ言う
しかなかった・・・でもそれが失敗の原因となると
はね・・・』

力がまだあれば、あんな事はせずに済んだ。秀二を憑依した時に、数分憑依が保てるような状況なら自殺などさせずに封印を解いた。だがあの時すでに声の力は弱まっていた。数秒しか保てなかったのだ。だから秀二を自殺に追い込んだ。秀二と正平の存在はことごとく、声の計画を狂わせた。

『・・・記憶をここで消せば・・・もう一度始めからやり
直せば・・・私の計画は・・・』

「そうはさせん」

突如小屋に低い声が響いた。恭介が振り返るとそこには居るはずのない人物がいた。

「・・・父さん・・・どうして・・・」

小屋の入り口に立っていたのは死んだはずの恭介の父親山崎拓郎であった。

「・・・恭介、お前は長の所へ。・・・私が時間を稼ぐ」
恭介は頷き走り出していった。拓郎は化け物の魂の

前に立つ。

「・・・あの者の両親は死んだはず・・・」

「・・・やはり気づいていないようだな、知能の低い化け物は」

拓郎は床に落ちている棒を拾い殴りかかった。本来ならば魂が痛みを感じることもない。だが声は確かに痛みを感じていた。

「・・・まさか・・・」

「貴様の力が弱った原因・・・それは恭介にある」

集落の全ての人々の命を守るため、恭介達の最後の手が打たれようとしていた・・・

六話

六話

「今まで騙っていて悪かったわね．．恭介」

「母さんまで．．一体．．これは．．」

恭介が長の家へ向かうとそこには恭介の母山崎雫がいた。幽霊などではないだろう。

だが、両親は恭介がまだ小学生辺りの頃に死んだはずだ。それが何故生きているのが不思議だ。

「．．隠すためだ．．化け物からお前の力を」

「俺．．の力？」

「この集落に隠された秘密の一つ．．それがお前なのだ」

長は語った。化け物を封印した一人の赤ん坊の話。拓郎と雫はこの集落で生まれた者ではない。拓郎も雫も国お抱えの霊能力者だった。その主な仕事は各地にいる悪霊化け物を退治すること。この集落に潜む化け物の力は恐ろしいほど強かった。国はこの集落を犠牲にし国家の安全を確保使用としたが、数人の者はそれとは別に行動を起こした。そして派遣されたのが雫と拓郎である。この二人とまだ赤ん坊だった恭介がこの集落に現れ、化け物に戦いを挑んだ。しかし、恭介と雫の力でさえ、化け物には勝てなかった。だがその戦いの最中、奇跡は起きた。化け物が二人を葬ろうとした時、まだ赤ん坊だった恭介が化け物と二人の間に割って入った。そして化け物は苦しみ出し、あの棺桶の中へと封印

された。

「私達夫婦は・・悪霊を退ける力を持っていたのでも・・あなたが使ったのは悪霊を封じる力だった。それままだ赤ん坊の子がね」

雫と拓郎は自分達では勝てなかったがこの子ならと思い、自分達が死んだと偽り、恭介の存在を隠そうとした。化け物は今まで恭介が自分と戦った霊能力者の息子とは全く気づいていなかった。

「そして・・化け物は私達の読みどおり、あなたを利用しようとしたわ・・」

拓郎達の作戦はそこでもう成功を迎えていた。化け物の魂は恭介と接触した。それにより化け物の力はすぐに弱くなった。秀二と正平の死を回避できなかったのは残念だ。しかし被害は最小限で済んだ。

「・・案ずるな、恭介。正平や秀二・・そして他の犠牲者達も奴を討てば戻ってくる」

「・・本当か？」

長も雫も頷いた。化け物の魂さえ討てば全ては終わる。そしてそれが出来るのは恭介しかない。赤ん坊の時であれだけの力を出せたのだ。今であれば倒せるはずだ。

「・・恭介・・本当はこんなことさせたくないけど・・今この集落を救えるのはあなただけなの」

「分かってるよ。・・やるしかないんだ」

少しでも可能性があるのならやってみるしかない。やらなくてはいけないのだ。今までの犠牲者を救うためにも。恭介は覚悟を

決めていた。秀二達だつて自らを犠牲にしてまでやり遂げようとしたのだ。ここで退くわけにはいかない。恭介達が山を見上げた瞬間、小屋の辺りで爆発が起きる。

「・・・父さん・・・」

「悪霊が集まつてきているわ・・・無理やり取り込むつもりよ・・・」

化け物が悪霊達を呼び集め、無理にでも自分の中に取り込もうとしているらしい。恭介は気づけば走り出していた。ここで拓郎を見殺しにすることなど出来ない。そのころ、拓郎は悪霊を取り込み力を得た化け物の魂相手に苦戦していた。

「・・・それがお前の最終手段か・・・」

「盲点だったわ・・・あの子があなた達の子供だったとはね・・・。それにあなた達が生きていたとは・・・」

拓郎は笑っていた。このままでは死ぬだろう。あの時は雫がいたから生き延びれたのだ。相手が全力では無いとはいえ、明らかに押されていた。だが恐怖など感じなかった。まして悲しみなどない。ただあるのは勝利の確信だけである。自分がここで消されても恭介さえ無事なら勝てる。拓郎は全てを息子に託した。

「そんな棒で何ができる？」

「何もしないさ。ただ・・・お前の中から悪霊を削るだけだ」

棒が白い塊の中に入り込んでいく。だ

が以前と異なり化け物の魂が痛みを感じることはない。今回は悪霊達が盾となっているからだ。だが拓郎の狙いはそこにあつた。化け物の魂を殺せないにしても、悪霊を削ることくらいは出来る。

「・・・せつかく手に入れた力だ・・・そう易々と手放しは・・・」

「もう遅い！」

化け物が拓郎に攻撃する前の僅かな一瞬で拓郎は化け物の魂と同化した悪霊の一部を払いのけた。その直後、化け物の攻撃が拓郎を直撃する。拓郎は飛ばされ数m先の地面に叩きつけられた。

「・・・くっ・・・」

また力が減っていく。せつかく集めた悪霊も三割程度が消えた。拓郎の意識はまだある。だが拓郎に憑依しても結果は同じだ。拓郎や雫は悪霊の憑依に対して抵抗する術を持っている。

「ここにいるのが貴様でなければ・・・」

山の斜面を誰かが走って登ってくる。拓郎はその姿をみて安心した。恭介は拓郎が手にしていた棒を拾い上げる。

「・・・そのような武器で私は倒せない・・・そんな貧弱なものではっ」

「・・・やってみないと分からないだろ」
恭介は集落を救うため。そして犠牲者達を救うために化け物の魂に立ち向かって行った・・・

七話

七話

『・・・目障りだ、お前のような存在は』

白い塊から白い光が刃となり飛んでくる。恭介はそれを回避した。恭介の少し後ろでは雫と拓郎が見守っている。二人は化け物の限界が

近いことを知っていた。攻撃に鋭さが無くなって来ている。

『・・・倒すっていつても・・・一体どうすれば・・・』

「ぶつければいい。お前の全ての力を」

ただそれだけで消滅するはずだ。恭介はとりあえず近づこうと思った。

この棒をあのかの塊の中に差し込んで力を注ぎ込めばいいのだろう。

ただ、その

力を注ぎこむ方法も恭介は知らないのだが。とりあえず何とかやってみるし

かない。

「お前を倒せば全て終わるんだ」

『・・・私を倒して全てが終わる？笑わせるなっ』

恭介は塊に近づいた。だが黒い霧のようなものが体にまとわりつく。

「・・・な、なんだ・・・これは・・・」

悪霊が体にまとわりついていて。振り払おうとするが上手くいかない。

『私をお前のような未熟者が倒せる訳がない』

恭介が悪霊を振り払うために、腕を必死に振っていた。その時、雫と拓郎

は信じられない光景を目にした。悪霊達が浄化されていくのだ。恭介の腕

の動きに合わせて。それは雫や拓郎の戦い方とはまったく別のものだった。

二人は悪霊を浄化させるのではなく、討ち滅ぼす。だが、恭介は滅ぼすの

ではなく、浄化させ、ただの霊体になっているのだ。それだけではなかった。

一部の浄化された霊体が恭介の力となっている。

「私達の子供とは思えないわね・・・この力・・・」

「ああ。俺達とは全く正反対の力の使い方だ・・・」

二人とも驚いていた。自分達とはまったく別の力の使い方。それモかなり

の技術を要するはずのものだ。それを恭介は無意識の内にやってのけてい

る。恭介は無我夢中で棒を振っていた。自分にまわりつく悪霊を払いの

けるために。

「・・・何が化け物だ・・・今となってはただの弱い奴じゃないか。人間一人

殺せないのか、お前は」

『許せないわね、その言葉』

悪霊が消える。化け物がそう指示したのだろう。恭介の狙い通りだった。

恭介は挑発したのだ。悪霊を消させ、一対一で戦うために。化け物はそ

の挑発にまんまとはまってしまった。悪霊と協力していればまだ勝ち目

はあったが、挑発され怒りで我を忘れてしまったのだ。判断能力を失い

勝機すら捨ててしまった。恭介は白い塊めがけて突進していく。もう恭

介の進路を塞ぐ悪霊はいない。恭介の手の中に棒が塊の中へと突き出さ

れる。そこから大量の力が無意識の内に流れ出て行く。化け物はその力

に抗おうとした。無駄であるを知りつつも、最後の抵抗に出た。

『・・・消えるの？・・・私が・・・』

「消えろ、化け物。・・・お前が消えれば全てが終わる」

最後まで化け物は抵抗した。流れ出てくる恭介の力を自らの物にするた

めに必死で抵抗していた。だが、その抵抗も二分ほどで終わった。白い

塊は光となり、消えていった。恭介は地面に座り込んだ。雫と拓郎の二

人が駆け寄る。

「終わったようだな・・・」

「ええ・・・よく頑張ったわ、恭介」

だが返事は無かった。拓郎と雫は恭介の顔を見て笑う。極度の緊張から

解放されたためか、恭介は安心しきった顔で寝ていた。

「・・・家まで運びましょうか」

「そうだな」

拓郎と雫の二人は恭介を連れて、山を降りていった・・・

八話

八話

恭介が集落を救うために化け物と戦ってから数日が経過した。過去の

犠牲者達も山の中で発見された。どうやらあの化け物が人を喰つてい

たというのは人々の勘違いだったようだ。あの化け物は人々の魂を自

らの中に取り込むことで力を得ていたらしい。化け物が消えたと同時に

に魂を抜かれただけの人は戻ってきた。だが秀二や正平のように殺さ

れた者達は戻ってこなかった。それでも恭介はこれで良かったのだと

思っていた。あの二人の死が無駄になることはなかったからだ。

「これでこの集落は救われたな・・あの掟も無効となるわけだ」

拓郎は恭介の隣に座りながらそんなことを言っていた。化け物がいな

くなつた今、掟など守る必要はない。だが拓郎と雫はこの集落で生活

することを決めたらしい。恭介は仕事はどうするのかと尋ねた。する

と拓郎は笑いながら答えた。

「もう俺達は引退だ。ここで俺達は暮らす。お前は・・外の世界を見たい

んだろっ?」

恭介は頷いた。この集落は確かにいい場所だ。それでもずっとここで

生活するのは嫌だ。もつと広い世界が見てみたい。秀二達の方まで。

今、集落が平和を取り戻したのはあの二人の力があつたからだ。

恭介

一人でやり遂げたのではない。というより恭介はもう少しで化物の

復活を手伝うところであつた。

「・・・俺は行くよ。ここの外で暮らしたい」

「頑張れよ、恭介」

二人がそんな会話をしていると、雫がやって来て、恭介に長が呼んで

いると告げた。恭介はすぐに長の家へと向かう。雫は拓郎の横に腰掛けた。

「これでやつと・・・私達の仕事は終わったわね・・・」

「ああ。長かつたが・・・これでようやく終わりだ」

そのころ恭介は長の家で長の話聞いていた。どうやらお礼が言いた

いらしい。だが、お礼を言われるようなことはしていない。

「・・・俺は何もしてません」

「謙遜する事はない。君が今回の事件を解決したのだ」

秀二達がいなければ声の正体は見抜けなかった。あの鏡を見せられた

時に、長話を聞いていれば、矛盾には気づかなかった。今回は

恭介

は周りの人間に助けられたのだ。

「もうここでは悲劇など起こらんよ・・・そうであつてほしい・・・」

それは長だけの願いではなかった。この件の真相を知る全員がそう願っていた。ここではもう悲劇など起こらない。どうかそうであつて

ほしい。ここが風景に似ているのどかな集落であってほしい。あんな

不可解な失踪が多発するような悲劇はもう起きて欲しくはない。それから二週間が過ぎた。集落には平穩の日々が戻ってきていた。もうこの場所で悲劇に怯え、暮らす必要などない。恭介は友人二人の

墓の前に立っていた。彼らに別れを告げ、恭介は集落を出て行く。この場所にもう二度とあんなことが起こらないように願って・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3208d/>

掟

2010年10月8日15時36分発行